

保育あきた瓦版

第55号 令和元年7月29日 秋田県保育協議会 広報委員会

～第47回 秋田県保育研究大会 特集～

第47回 保育研究大会を終えて



秋田県保育協議会副会長 澤口 勇人

由利本荘市ホテルアイリスのメイン会場には大会関係者を含めると約500名というかつてないほど多くの参加者が集まり、第47回秋田県保育研究大会ははじまりました。私はそれをステージ上から眺めていましたが、秋田県内の保育関係者の保育に対する熱意がひしひしと感じられ、この時点で今大会の成功を確信することができました。

さて、今回の保育研究大会は、分科会の発表テーマを発表者が自由に選べるようになって2回目の大会となりました。これによって普段から興味を持って研究に取り組んでいる成果を発表することができることから、決められたテーマに取り組まざるを得なかった以前の分科会に比べ、より充実した研究発表になりました。しかし今回新たな問題も発生しました。それは、普段から私たちが興味のあるテーマ、今回で言えば第1分科会の「子どもの育ちを保障する 新たな時代の保育実践～すべての子どもにむけて～」に発表希望が集中してしまったことです。そこで発表時間や参加者数の都合上、このテーマを選んだ6園を2園ずつ計3つに分けて分科会を開催しました。ところがいざ北海道・東北ブロック大会の選考をしようとした段階で、選考委員である助言者が同時に他の2つの分科会に参加できないことから、発表内容は以前よりも充実しているにもかかわらず、正確な選考が難しくなってしまったのです。これは当初から想定されていたこととはいえ、今後も発表者数に偏りが出た場合どのように対応するべきか、十分に検討をする必要があると思います。

ところで、今保育業界で最も切実なテーマは、「幼児教育・保育の無償化」への対応です。特に私たち保育関係者が望んでいた、全ての保育関係費の無償化から給食費と副食費が外れ、今年の10月時点では“完全な無償化”ではない形で実施されることになってしまいました。そのため今後保護者理解を得ることと合わせて、事務処理の複雑化にそれぞれ対処していかなくてはなりません。

最後になりますが、由利本荘・にかほ地区の皆様には、今回の保育研究大会を無事成功裏に終わらせていただいたことに対してこの場を借りて感謝の気持ちを表します。本当にありがとうございました。そして、来年は第48回秋田県保育研究大会が横手市で開催されます。同地区の皆様も準備作業で大変なことと思いますが、今回同様実りのある保育研究大会になるよう期待しております。

第47回秋田県保育研究大会を振り返って

第47回秋田県保育研究大会 大会実行委員長 猪股 豊

由利本荘市・にかほ地区において開催された第47回保育研究大会。本研究大会の要所要所に由利本荘市・にかほ市らしい特徴ある大会にしたいという思いで準備致しました。その思いに応えて頂き、全県から多数の保育関係者の皆様が集結し、参加者総数500人を超える方々による熱意ある研究討議がなされましたことに心より感謝申し上げます。

シンポジウムでは「少子化問題と乳幼児教育・保育制度のあり方」というテーマで、喫緊の大きな課題について4人の登壇者による白熱したシンポジウムとなりました。また、分科会においては、どの発表園も職員間で共通理解を持ち一生懸命取り組んだ質の高い内容だったのではないのでしょうか。そして、特別分科会Ⅰでは、「鳥海山木のおもちゃ美術館」に出かけ木に触れ遊ぶ保育を実践するフィールドワークを行いました。特別分科会Ⅱでは、「保育運営塾～施設長等に求められる役割・責務」も特徴ある分科会となりました。

交流会会場に皆様をいざなう音楽を演奏したのは、学生時代吹奏楽経験のある保育士の3人組でした。民謡は県立由利高校時代民謡部に所属していた職員が昔とったきねづかで踊りを披露してくれました。番楽は、にかほ市の鳥海山小滝番楽のメンバーに男性保育士が1人参加していました。

交流会の料理は、由利本荘市のB級グルメ本荘ハムフライ、ご当地本荘うどん、由利牛のビーフシチュー。由利本荘市・にかほ市には5つの酒蔵があり、美味しいお酒をご賞味頂きました。何よりも嬉しいのは、ご馳走・お酒を堪能して頂いたことです。

東京おもちゃ美術館の多田館長による記念講演「おもちゃと木育による多世代交流」では、子どもには五大芸術が必要であることや、保育力は地域にあるのだという言葉が心に残りました。研究大会終了後、鳥海山木のおもちゃ美術館に興味を持った多くの方々が訪ねて下さったとのことで、深く学びながら、より由利本荘市・にかほ市を知って頂けた研究大会になったのではないのでしょうか。関係各位のご協力により、無事令和元年度の保育研究大会を終了できましたことに、心から感謝申し上げます。



第1分科会①

●子どもの育ちを保障する

新たな時代の保育実践～すべての子どもにむけて～

参加者 43名

提案者	保育士 山本 みどり (城南保育園分園)	助言者	准教授 蛭田 一美
	保育士 菊池 則子 (沼館保育園)		(聖園学園短期大学)
	保育士 本間 恵 (沼館保育園)	園長 上村 清正	(あおぞらなないろ園)

【主な提案内容】

- 「自分なりに考え表現して遊ぶ子ども」を育むために、子どもの「主体性」に視点を置き、エピソードカンファレンスと園内の相互参観を通して保育者の関わり方を見つめ直した。一人の子を多角的に見つめる機会を持ったことで、子どもには保育者に気持ちを受け止めてもらえる安心感が生まれ、保育者には子どもの姿から内面を見取ろうとする姿勢が身についた。
- 遊びの環境を見直し、豊かな遊びの体験を増やすことで子どもの心の育ちや主体性を引き出したいと「ゾーンによる保育」を行い、子どもの心情・意欲・態度を育むことを重点に保育者も相互的に関わる。遊び込める環境構成や遊びの続きを保障した保育の展開に、子どもの自己表現力や探究心の向上が見られ、子ども同士がお互いを認め合うなど、心の成長が見られた。

【助言者から】

- 保育者が子どもの育ちの変化に立ち会いながら、連続して遊びこめる環境作りをしたことは素晴らしい。子どもの欲求を満たして遊びが継続し、内面や学びを理解して保育をすることが専門職としての保育者の役割。秋田全体の質の高い保育を期待する。
- テーマに対して年齢の発達を捉え、各年齢が繋がっていた。子どもの特徴をとらえ、子どもの姿を見て育ててほしい姿を描くことが大事。
- 連続して子どもを見ていく中で子どもに変化があった時、自分の見方が広がったということが真の意味の“見取る”ということ。保育者は自分を柔らかくして目の前の子どもを見る。
- 保育指針の改定の重点は、子どもの資質能力を育てることが問われている。いろんな可能性を持った子どもにどんな能力があるかを見るアンテナが私達保育者にどれだけあるか…。子どもと一緒に遊び、共に感じ合う心を持つことが大切。保育を語れる同士と一緒に楽しい子どもを発見して、楽しい子どもを語れる仲間＝チームでありたい。

第1分科会②

●子どもの育ちを保障する

新たな時代の保育実践～すべての子どもにむけて～

参加者 58名

提案者	保育士 下間 栄利子 (若美南保育園)	助言者	教授 山名 裕子
	副主任保育士 島田 亜紀子 (大森保育園)		(秋田大学教育教育文化学部 こども発達・特別支援講座)
	保育士 高橋 美紀子 (大森保育園)	園長 大友 潤一	(やまばと保育園)

【主な提案内容】

- 自然との関わりの中で、保育士がどのように環境を構成していくかで子ども達が経験する内容は変わってくる。恵まれた環境に感謝し、日々変化していく自然の不思議さに気付きながら様々な自然物を遊びに生かしたり、楽しさを味わったりできるような環境の構成を工夫することで、遊びが充実し、豊かな心が育っていくのではないかと考えた。
- 他児を気にかける姿や異年齢間での自然な関わりが以前より見られなくなり、子ども同士の関係が希薄になっていることを感じる。職員間の共通理解のもと、異年齢児との関わりを大事にする保育を重点的に、「親しみ」「思いやり」「あこがれ」の気持ちを持てるような保育の工夫が必要と考え、3歳以上児で意識的に関わられる保育の実践と研究を展開する。

【助言者から】

- 環境に応じて、子どもの行動が制限されたり、保育者の意図的保育によって子どもが受け身になるなど、保育者がどこまで子どもに任せ認めるかが重要になる。
- 異年齢保育を設定すると、意識しすぎて子どもの姿や活動など、保育者が答えを用意した保育になりがち。子どもの主体性を大切にすること、また保育者の考えや求めた役割を超えた子どもの姿を認められるかが大切。
- 環境・異年齢保育など、これから多くの地域で取り組まなければいけない少子化の問題。集団生活が成り立たなくなっていく恐れがある中で、どう工夫して保育していくか、問題提起となった。
- まとめとなった時に大人の視点ではなく、子どもの視点はどうか、子どもはどう思っているかを考えてみるとよいのではないか。活動を通して子どもがどのような経験をし、どう育っているかなど、もっと子どもの姿が出てきて良いと感じる。

第1分科会③ ●子どもの育ちを保障する

新たな時代の保育実践～すべての子どもにむけて～

参加者 44名

提案者	主幹保育教諭 中川 麻美 (あきた中央こども園)	助言者	講師 畠山 君子 (聖霊女子短期大学)
	主幹保育教諭 目黒 蘭 (あきた中央こども園)		園長 佐々木 一江 (大曲駅前こども園)
	保育教諭 岩川 明子 (いわさきこども園)		
	保育教諭 阿部 真菜美 (いわさきこども園)		

【主な提案内容】

- 生きる力を育める子を保育の重点に置き、「やってみたい！やってみよう！」と子どもが主体的に遊びを楽しめるように環境を設定し、エピソード記録やカンファレンスを通して子どもの内面性や育ちの連続性を理解し、興味・関心・意欲に応じた保育者の援助や環境構成を計画・実践した研究。
- 自然遊びを通して、子どもの姿から心の内面を読み取り、心の声や子どもの姿を家庭へも伝え、育てたい10の姿へ繋げていき、一人一人に寄り添った教育・保育を実践することで主体性を育み、生きる力の基礎を身につけていくことを目指した。

【助言者から】

- 両園共に子どもが主体的に生活したり遊べるように環境設定を考え、仮説をしっかりと立てて研究

を進めていた。

- 保育者主体になってしまった失敗エピソード記録もあると、研究の深まりが伝わると感じた。
- 保育はチームで行う。カンファレンスを積み重ね、多数の職員であらゆる方面から子どもの内面を読み取ることで、保育の改善を図り保育者の専門性や質の向上に繋がり、園全体でのカリキュラムマネジメントを進めることにもなる。
- 5歳児の終わりまでに育てたい10の姿は、卒園までにできるという到達点ではなく、子どもの姿や遊びから10の姿が育っているかを見ていく。その育ちを保護者に伝え共有していることが良い。
- 乳幼児期は人として心ができる時期である。保育士はこの大事な時期に携わる大切な仕事である。保育園は、愛情に満ち信頼できる場所であることで、子ども達は安心感のもと遊び、生活し成長していく。



第2分科会 ●子どもの育ちを保障する

配慮を必要とする子どもや家庭への支援にむけて

参加者 77名

提案者	保育士 鈴木 千佳子 (阿仁合保育園)	助言者	教諭(兼)教育専門監 宮野 俊実
	保育士 泉谷 直子 (みつば保育園)		(秋田県立ゆり支援学校教諭(兼)教育専門監)
	保育士 鈴木 沙也加 (みつば保育園)		園長 小塚 光子
			(幼保連携型認定こども園しゃろーむ)

【主な提案内容】

- 5歳児クラス3名在籍のうち3名とも配慮を必要とする子どもであり、充実した園生活を送り、成長していくために、一人一人の特性について学び、関わり方や手立てを保育者間で共通理解していった。一人一人に合わせた行事への参加の仕方を考え実践し、保護者の思いに寄り添い、家庭支援につなげていった研究内容であった。
- 配慮が必要な子どもや家庭への支援の充実を目指し、ケース検討会議で全職員が共通理解していった。特定の保育士との信頼関係を基盤とし、視覚に訴える環境作り、周囲の子どもとの関わりを深めていった研究内容であった。

【助言者から】

- 関係機関と連携を取り合い、聞く・学ぶ・実践をし、見える化することを全職員で共通理解しているのが良かった。

- 個別支援計画を立てるためには、アセスメント（子どもの実態把握）が必要。
保護者・前担任・医療機関からの聞き取りが大切。聞き取りをすることにより、信頼関係が持てる。
- 支援は、最初は手厚く、徐々に一人で出来るようにしていく。過度な支援は子どもの積極性がなくなる。見守り、待つ支援をすることにより、子どもの成長、変容が見えてくる。
- 保護者との関わりで信頼関係を作る一番の近道は、その子の頑張っている様子を沢山伝えること。
保護者が相談したいと思った時、自分の子どもの様子を沢山伝えてくれた先生に相談してくる。

第3分科会 ●子どもの育ちを保障する

保育者の資質向上を図る

参加者 64名

提案者 保育士 石岡 賞子（藤里保育園）
保育士 加藤 優大（藤里保育園）
主任保育士 渡部 幸子（鶴川保育園）
主査保育教諭 橋本 由紀子（だしのこ園）

助言者 指導主事 浅野 直子
（秋田県教育庁 北教育事務所）
園長 田中 真由美
（毛馬内保育園）

【主な提案内容】

- 「育ちに合った遊びの見取り」をテーマにし、エピソード記録やカンファレンスをすることで、保育者の関わりや環境構成を見直し、子どもの育ちや内面を見取るための、各年齢で捉える「育みたい姿」に視点をおいた。
- 核家族化や少子化の影響を受け、体を動かす機会が減り、ケガにつながる子どもが多く見られる。
日頃の運動遊びや散歩を意識した保育内容、環境構成により、遊びのなかで運動能力を高めることで健康な心と体を目指した。
- 子どもの心が動く時、ワクワクドキドキする気持ちが生まれる時こそ、大きく育つ子どもの姿の実践事例を持ち寄り、子どもの変容を明確に捉え、保育者一人一人の気づきや課題を意識していた。
- 子どもの思いが実現できる環境の構成を工夫することで生き生きと主体的に遊ぶ姿を目指した研究。

【助言者から】

- 時間を決めて継続することが大事であり、職員の視点がぶれずに整理されていて、よく理解している内容であった。
- 色々な気づきを当たり前と思わないで取り組んでいる所が良かった。
- 子どもの行動や言葉を拾い上げて意味を考え、保育者がどう変わったか、そこからどうなったか、という内容が丁寧に記録されていた。
- 多様な意見を交換することが大事で、多面的な子どもの捉え方がされている。提案をするカンファレンスはとても良かった。カンファレンスを繰り返すことでスキルアップにつながっている。
- 主題設定が分かりやすく、「ワクワクドキドキ」の言葉が保育士の心に入っていきやすいテーマであった。また、共通理解が図られ、幼児理解されていることが良かった。

第4分科会 ●子育てライフを支援する

地域の子育て家庭への支援の充実にむけて

参加者 54名

提案者 保育士 佐々木 操 (秋田駅東保育園) **助言者** 理事長 椛沢 幸苗
保育士 丹波 文子 (秋田駅東保育園) (保育総合研究会会長・中居林こども園理事長)
保育士 小白川 美樹 (秋田駅東保育園) 園長 藤井 みはと
(中央保育園)

【主な提案内容】

○核家族で住んでおり、近くには祖父母が暮らしているが働いている事から育児は父母のみで行っている家庭が多い。そのため育児に不安を持つ保護者が多く、子どもがどのように成長していくのか、育児の楽しさを知らずにいる家庭が多いのではないかと考えた。「保護者とともに成長を喜び合う」を目標に掲げている園である事からどのようにすれば保護者支援になるかと考え、育児の楽しさや各年齢の発達を知らせる方法としてドキュメンテーションを活用した研究である。

【助言者から】

- 園での生活の姿をその日に伝えるためドキュメンテーションを活用し、保護者に発信している事、そして他クラスの保護者や祖父母などにも見てもらうために行っている「見ましたシール」という案はとても良い考えである。このドキュメンテーションを継続している事や地域に向けての情報発信やホームページの見直しを行っている点がより素晴らしかった。
- 園全体で共通理解し、各年齢の発達段階がつながりあるものになっている点がとても良い。
- 「伝えたい保育士の思い」だけでなく「子どもの学び」という表現で保護者に伝えていくとより良い。具体的に保育園では経験の場を作り、活動した事でどうなったか、どういう育ちにつながり、どう育ったかを伝える方法というのがドキュメンテーションの役割になるためうまく活用して欲しい。

第5分科会 ●多様な連携と協働をつくる

子どものより良い育ちにむけた関係機関とのネットワーク

参加者 32名

提案者 主任保育士 瀬川 涼子 (小坂マリア園)
保育士 笹舘 恵子 (小坂マリア園)
副主任保育士 佐々木 真理子 (ひかり保育園)
副主任保育士 小笠原 恵美 (ひかり保育園)

助言者 園長 打田 修子 (幼保連携型認定こども園^{かがりの}藤乃こども園)
園長 津谷 ゆき子 (愛美保育園)

【主な提案内容】

- 近年、核家族化が進み、保育が長時間化し、様々な人と接する機会が少なくなっている。相手の気持ちをくみ取ることが難しかったり、自分の思いばかりを通そうとしたりする姿がみられる。
- こうした実態を受け、世代を超えた方々との交流する機会を増やし、地域交流を通して子どもが

どう成長していくかに焦点をあてる。園児だけでなく地域の方も「心豊か」に過ごせるような交流のあり方も探る。

- 時代と共に子どもを取り巻く環境が大きく変化し、周りの人や物への興味関心が薄れ、自然と触れ合う機会や五感を使った体験が減ってきているのではないか。同法人三園がそれぞれ違った環境の下、園内研修を重ねる。木育活動を通し木のもつ可能性を活かして人と人をつなぐ、様々な体験。保育園を基盤として家庭や地域、多世代と関わることで子どものより良い育ちにつながる保育を目指した研究。

【助言者から】

- 町総合計画のもと保育園と福祉保健総合センターが隣接され、保育園と地域の方との交流を通し、町全体で人の成長を大事にしている。異年齢児保育と年齢別保育を混ぜて行っており、自然体で地域の方と関われるようになった実践。子どもと地域への効果があり、PDCAも研究の中に折り込まれており良かった。
- 一つのテーマを三つの園で取り組んだスケールの大きい研究、様々な実践が素晴らしかった。木育の効果が家庭、地域、多世代へとつながり自己肯定感を持てるようになり、体験を通すことの意味を教えてもらった。また、人と人との関わり、優しさ、温かさを感じること等の目に見えない人間力をつけることができたのではないか。

第6分科会 ●子育て文化を育む

「食を営む力」の基礎を培う食育の推進

参加者	31名		
提案者	主任保育士	福田 香織	(グリーンローズてがた保育園)
	栄養士	小田原 栄子	(グリーンローズてがた保育園)
助言者	准教授	瀬尾 知子	(秋田大学教育文化部こども発達・特別支援講座)
	園長	九嶋 洋子	(轟保育園)

【主な提案内容】

- 主に栄養士が取り組んでいた食育活動を、保育所保育指針の改定を機に全職員で取り組みを見直した実践研究。
- 「たあねの約束」を掲げ、健康の3原則である「食事・運動・休養」の生活リズムを整え、子どもの頃から健康な心と体の土台を作っていく必要があると考えた研究。

【助言者から】

- 栄養士だけでなく職種を超えて園全体で取り組んだこと、目指す子ども像を明確化したことがよかった。
- 子どもが興味をもつようによく考えられている。「たあねレンジャー」が教えてくれることでより効果が得られている。保育士が楽しいことを考え、自ら楽しんだことで活動が子ども達に浸透している。
- 保護者も同じ体験をすることで、子どもとの接点を得られ関わりが密になる。保育園で経験したことが家庭で活かされており、保育園の役割がしっかりなされている。豊かな保育に触れると、親は子育てが楽しいと思えるはずである。

第7分科会 ●子育て文化を育む

保育の社会化にむけて～保育の営みをいかに社会に発信するか～

参加者 12名

提案者 主任保育士 佐藤 陽菜 (永慶保育園)

保育士 佐々木 慶子 (永慶保育園)

助言者 准教授 瀬尾 知子 (秋田大学教育文化部こども発達・特別支援講座)

園長 九嶋 洋子 (轟保育園)

【主な提案内容】

- 地域の高齢化が進む中で地域交流の内容や方法を見直し、よりよい関わりを見つけるための実践研究。
- 地域の人との関わりの中で、子ども達の自然への興味や関心が高まり、その体験が「心に残るふるさと子育て」につながると考えた研究。

【助言者から】

- 発表の中の写真から、保育者の熱意が伝わり素晴らしかった。
- 地域の特色や恵まれた環境を活かして活動している様子が伝わった。
- テーマの設定から実践まで、計画的に行われていてよかった。地域の人との関わりから、人の温かさに触れることができている。幼児期のこのような体験が、ふるさとを思う気持ちにつながっていくと思う。
- 自園ではどのような取り組みができるかを、職員間で話し合うことが大切である。

特別分科会 I ●フィールドワーク

木にふれ遊ぶことを生かした保育を実践するために (鳥海山木のおもちゃ美術館)

参加者 11名

助言者 おもちゃコンサルタント・マスター 佐々木 美喜子

木育インストラクター 益満 雪絵



【見学内容】

- ◎鳥海山木のおもちゃ美術館 (講話・美術館ツアー)
- ◎齋彌酒造 (酒造見学)

【講義の内容】

- ・世界の森林率は30%。緑がある風景が当たり前でない国が多い中で、日本の森林率は70%。世界基準でありがたい国で生活できている。その中でも由利本荘市は75%で恵まれている。
- ・木育の定義…木の命を頂いて生活できている、ありがたみを学んでもらえる。

↓

“感謝する心” “ありがたい気持ちを持つ” ためには木育が有効とされている。

- ・子どもたちは日々遊びの中から学んでいる。

(例) 丸い積み木を手にする。木の色、香り、重さ、年輪など違いがあることを子どもにも感じて

欲しい。

- ・シンプルだからこそ想像力豊かに遊ぶ。男女問わず親から子へ、世代を越えて遊べる。
- ・子ども達が遊びの中から“生きる力”をつけていけるように、将来の子どもへの思い、心豊かな子どもへということを私達がどう伝えていくかが重要になってくる。

【全体の様子】

- ・11名の参加で和やかな雰囲気でのフィールドワークとなる。
- ・「木育」木と保育の繋がりを実際に丸い積み木を手に取りながら、その木の持つ色、香り、重さ、年輪など感じる。
- ・子どもへどう伝えていくか、子どもの遊ぶ姿をイメージしながら真剣に講話を拝聴していた。それによって、子どもの想像力が豊かになり、言葉豊かな子どもに育つように、私達の関わりが重要である事を学んでいた。
- ・手触りを確かめたり、香りを楽しんだり、五感で木のぬくもりに触れ、童心にかえって楽しむ姿が多く見られた。

特別分科会Ⅱ ●保育運営塾

施設長等に求められる役割・責務

参加者 42名

助言者 日本保育協会 理事 こども園ひがしどおり 理事長 坂崎 隆浩



【主な講演内容】

- ・10月から幼児教育・保育の無償化されることに伴い、主食・副食分の給食費を月額4500円を目安とし、保護者が保育園に支払うこととなる。
- ・無償化を実施し、不具合や疑問点があれば1月～2月中に意見を提出する。
- ・食育の充実を図るためチーム保育推進加算・栄養管理加算を拡充していく。
- ・新制度施行後、5年の実施状況を踏まえた公定価格の見直しを行う必要があるが、土曜保育やアレルギー除去食、欠席時などの課題もある。

【討議の内容】

～5年目を迎える新制度と保育料の無償化についての2つを柱立てに、保育運営に関する自園の課題や問題に対する対策についてグループごとに情報交換をする。

- ・無償化となり、保護者への説明をどのような方向で行っていくか
- ・処遇改善Ⅰ・Ⅱについて
- ・キャリアアップ研修の職員の様々な変化
- ・人材育成について
- ・教育的な面の保護者への発信の仕方について など。

【全体の様子】

- ・10月に差し迫っている幼児教育・保育の無償化についての関心が特に強く、ここに至るまでの経緯や実施にあたっての問題点など、坂崎先生の具体的な話に興味深く耳を傾けていた。
- ・グループ討議では自園の現状など活発に意見交換されていた。

ご出場 おめでとうございます！

第63回 北海道・東北ブロック研究大会

分科会	園名	提案者	発表テーマ
1-③	いわさきこども園	保育教諭 岩川 明子 保育教諭 阿部 真菜美	生き生きと遊べる子を めざして
2	みつば保育園	保育士 泉谷 直子 保育士 鈴木 沙也加	インクルーシブの保育の 視点から個と集団の育ち を考える
3	藤里保育園	保育士 石岡 賞子 保育士 加藤 優大	明日につながる豊かな 育ちのために
4	秋田駅東保育園	保育士 佐々木 操 保育士 丹波 文子 保育士 小白川 美樹	「遊び」の大切さを保護者 にいかにつたえるか
5	ひかり保育園	副主任保育士 佐々木 真理子 副主任保育士 小笠原 恵美	豊かな心を育むために
6	グリーンローズ てがた保育園	主任保育士 福田 香織 栄養士 小田原 栄子	たあねの約束

◎北海道・東北ブロック研究大会で、いわさきこども園とグリーンローズてがた保育園が表彰されました。おめでとうございます！

第62回 全国保育研究大会

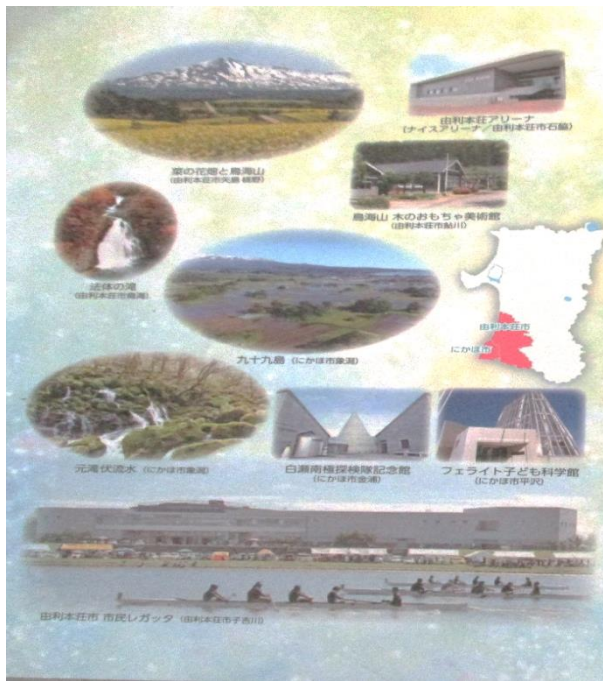
秋田駅東保育園 「遊び」の大切さを保護者にいかにつたえるか
～地域の子育て家庭への支援の充実にむけて～ 第4分科会の発表となります。

編集後記

秋田県保育研究大会は第47回を迎え、先人の子ども・子育てに対する情熱に思いを馳せ、これまで積み重ねられてきた歴史の重みを感じました。二日間を通して「すべての人が子どもと子育てに関わりをもつ社会の実現」ということの意味の深さを考える機会となりました。本号発行にあたり、寄稿いただきました皆様、本当にありがとうございました。

今年度から新しい広報委員が編成され、この「保育あきた瓦版」の発行が最初の活動となりました。広報委員会では、たくさんの気付きや学びを、皆さんと共有していけるよう活動に取り組んでまいります。二年間どうぞよろしく願いいたします。

(広報委員長 三浦 裕美子)



～交流会より～



広報委員名

担当副会長	須藤 まゆみ	(川添保育所)
広報委員長	三浦 裕美子	(ウェルビューいずみこども園)
広報副委員長	児玉 一枝	(雄和中央保育所)
	伊藤 麻由子	(鵜川保育園)
委員	豊田 佳子	(あおぞらこども園)
	伊藤 幸美	(矢立保育所)
	石黒 幸子	(昭和こども園)
	柴田 香織	(あきた中央こども園)
	齋藤 美和子	(星城保育園)
	鈴木 美奈子	(ひのきないこども園)
	小野崎 一美	(せんだうこども園)